雲と嵐～雲視点～

嵐炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雲と嵐～雲視点～

【Ｎコード】
Ｎ３１８６Ｗ

【作者名】
嵐炎

【あらすじ】
「一緒に旅行行きませんか？」
沢田綱吉からの誘いから、僕の全ては始まった…。

0－1（前書き）

これは「雲と嵐」シリーズの雲視点、つまり雲雀側の小説です。
読む前に嵐視点を先に読む事をおすすめします。

0―1

最近気になる奴がいる。

僕がそう考え始めたのはいつからだろう。

夏休み前からだったのは間違いない。

でも夏休みに起こった1つの出来事によって、その考えは徐々に変わっていった。

“考え”から“想い”へと。

その出来事のきっかけは、沢田綱吉からの誘いだった。

「あ、あの…雲雀さん」

「何。僕は今忙しいんだ。早く言ってくれない？」

その時僕は風紀の仕事で忙しかった。

「一緒に…旅行行きませんか？」

「…は？」

僕は手を止めた。

「あ、いやあの…実は…」

僕は沢田綱吉から旅行の意味を聞いた。

どうやら山本武がそんな企画を持ち込んだらしい。

「…ふーん…」

「ど、どうですか？」

別に興味がないわけではなかった。

その宿は注目される前から気になっていた。

景色もキレイだと噂で聞いていた。

でも、何より一番いやなのは…

群れる事だった。

「嫌だね。」

「ですよね…」

0―2

そう言うと沢田綱吉はため息をついた。

ため息つくんだったら、誘わなければいいのに。

僕は仕事に戻ろうとした。

「まぁそんな事言うな。」

そう言って出てきたのは

「リボーン！」

「ちゃおっす、雲雀。」

「赤ん坊か。何の用だい」

「お前、そんな事言わずに旅行来いよ」

赤ん坊までもがそう言った。

「赤ん坊に言われても僕は行く気はないよ」

「…手合わせしてやろうと思ったけどな」

赤ん坊は呟いた。
勿論聞き逃さなかった。

「…どういう事だい？」

「もしお前が行くって言ったら帰った後にでも手合わせしようかと考えてたけどな…」

迷った。

群れるのは確かに嫌いだ。
だけど赤ん坊が自ら手合わせの事を言っている。

行くべきか。行かぬべきか。

「…誰が来るの」

聞いてみた。

「あ、えっと…」

沢田綱吉が名前を挙げていく中で、１つだけ興味のあった名前が聞こえた。

それで決まりだった。

「…何時にどこで集まるの？」

沢田綱吉は驚いた顔をしていた。

「ひ、雲雀さん？」

「決まりだな」

こうして僕は草食動物たちが群れる旅行に参加することになった。

１つは赤ん坊との手合わせのため。

もう１つは…

僕が気になっていた奴といるために。

0―3

当日。

僕が着いた時には、すでに山本武がいた。

「おっ、珍しいのな」

そう言うとなぜかペットボトルの緑茶をくれた。

「…何で？」

「特に意味はないのな」

天然なのか何なのかよくわからない。

けど僕は山本武には興味ないんだ。

すると

「お、おはようございます…。」

「ニイハオ！！」

女子登場。

「おはようなのな」

霧の守護者は僕の顔をずっと見ていた。

「…僕の顔に何かついてるの？」

「いえ…珍しいなって…」

なぜか少しムッとした。

そして僕が駅に着いてから1時間後。

「ごめん！待った？」

ようやく誘った本人登場。

沢田綱吉は僕の存在に気付くと、すごく目を輝かせてこちらに向かってきた。

「良かった！来てくれたんですね！！」

僕は気付いた。

沢田綱吉の後ろにいた一人の存在を。

やっと見つけた。

僕が気になっていた奴。

それは沢田綱吉の自称右腕の問題児。

名は、獄寺隼人。

「別に君のためじゃないよ。僕は赤ん坊に呼ばれたから来たんだ。勘違いしないでくれる？」

すると彼は納得したようで手をポンッとしていた。

確かに僕は赤ん坊との手合わせのためにこの旅行に来た。

でももう1つ理由があった。

それは

獄寺隼人といるために。

たぶんこっちが本当の理由なのかもしれない。

「間もなく3番線に…」
アナウンスが流れる。

こうして僕の「獄寺隼人観察旅行」は始まった。

…それは僕が想像した以上に中身の濃い旅行となった。

0－3（後書き）

プロローグ終了！

（▽｀）＝3ふぅ

次から第1章です！

第1章　観察（前書き）

第1章です！

これヒバ獄のつもりで書いてるけど、だんだん分からなくなってきたよ。（おい

第1章　観察

今、僕はとても嬉しい。
こんな偶然あるだろうか。

別に神様とか信じていないけど、とりあえずありがとう。

事の流れはこうだった。

～移動中…～

「はい！みんな注目！！」
沢田綱吉がそう言うと、手の中には４本の割り箸があった。

「旅行ていうことなんで、くじでペアを決めようか！」
女子は二人だけだからすでにペアになっていた。

で、残りの僕達のペアを決めようという事だった。

「みんな持った？いくよ！せーのっ…！」

僕は赤だった。

特に何も期待はしていなかった。

どうせ山本武となると思っていた。

するとあちらはあちらで何か盛り上がっていた。

多分、獄寺隼人が沢田綱吉と一緒になって喜んでいるんだと思った。

やっぱりな…

そう思ってため息をついた。

するといきなり

「お、お前…赤？」

獄寺隼人が聞いてきた。

「だから何」

すると彼はいきなり

「ぬぁぁぁぁ…！」

と叫んだ。

「お、おい獄寺！」

「獄寺くん！！しっかりして！！」

とりあえず心の中で呟いた。

ワオ。

そして現在。

「…な、何でよりによって…こいつと…」

彼は今にも泣きそうな声で言った。

不覚にもかわいいと思ってしまった。

獄寺隼人。

やっぱり彼は興味深い。

そしてこの後に起こる事件によって…。

…全ては始まった。

第1章　観察（後書き）

雲雀さんが「かわいい」って思ったよ！？

あの雲雀さんが！！

なんかキャラ崩壊してるような…（；゜０゜）

まあいいかw

１―１（前書き）

雲雀さんが頑張ってますｗ
よほど獄寺が小動物に見えるんでしょうなｗｗ

1―1

海に来た。

泳ぐつもりはない。

本当はすぐにでも部屋でくつろいでいたかった。

けど仕方なく群れている。

獄寺隼人の観察のために。

着いた途端に小動物達は海に向かっていった。

多分獄寺隼人は僕といたくないんだろう。

そう考えると少し胸が痛い。

まあ仕方のない事だ。

彼の頭の中はいつも沢田綱吉の事で一杯なんだし。

少しでもその頭の中に僕の存在があればなんて、叶わぬ願いだ。

すると休憩のために彼が一旦帰ってきた。

長い間日光に当たっていたからか、肌が赤くなっていた。

結構肌を気にしているんだろう。

念のために入れておいたモノをポケットから取り出した。

「ねぇ」

「は、はひぃ！？」

どこかで聞き覚えのある言葉だった。

すごくびっくりした顔で僕を見ている。

かわいいと思いつつ、いつも通りに話す。

「使えば？」

そう言ってモノを投げる。

「何だよ、これ？」

「日に焼けたくないんだろ？」

すると彼は使い道を理解した様だった。

そして照れつつも

「あ、ありがとな…」

と言った。

ワオ。

今回は素直だな。

いつもなら

「ひ、日焼け止めクリームぐらい持ってるつの」

とか言うんだろうけど。

やっぱり彼は興味深い。

…というかかわいい。

すると

「な、なぁ雲雀」

珍しく彼から話しかけてきた。

「何」

「お、お前も一緒に…」

その瞬間、何かが切れた。

「ワオ…群れるのが嫌いな僕にそんな事を…」

たとえ興味深い彼から誘われたとしても、群れるのを我慢するのがやっとの状態に極めつけが来た。

「…咬み殺すよ？」

彼の体がびくっとした。

「だよな！じゃ！！」

そう言って彼は沢田綱吉達の所へ戻っていった。

…もう少し群れを耐える力をつけた方がいいらしいな…。

そう感じた昼下がりだった。

1―2　上（前書き）

ついにあのシーンです…！

長くなりそうなので、上下で分けました。

1―2　上

そうして彼は沢田綱吉達と一緒に遊んでいた。

何か会話をしている。

すると彼は近くの岩場へと歩いていった。

後ろから見た彼は嬉しそうだった。

どうやらその岩場が気になっていたらしい。

かすかに鼻唄が聞こえてきた。

よほど機嫌がいいらしい。

その時だった。

「獄寺くん！！危ない！！」

沢田綱吉がそう叫んだ。

何かあったのか？

彼のいる岩場を見た。

すると大きな波が彼を隠した。

そして…

彼は消えた。

「獄寺くん！！」
「獄寺！！」
「…嵐の人…」
「獄寺さん！」

一瞬だった。

あっちはあっちで大騒ぎだった。

少し様子をみてみた。

…すごくイライラした。

耐えきれなくなって僕は海へと向かった。

「ひ、雲雀さん？」

焦っていた沢田綱吉が呼び止めた。

「お前、まさか獄寺探しに行くつもりか？」

山本武が言う。

「…あれは僕のペアだから」

そう答えて海に入った。　～～～～～～～～～～～～本当に一瞬だったから、彼がどこへ行ってしまったのかは分からない。

でもそれでも探す。

理由はただ１つ。

観察対象がいなくなるのは困るから。

～～～～～～～～～～～～かなり探してみたが、そう簡単に見つかるわけもない。

違う場所を探そうと思った時だった。

一瞬何かが光った。

まさか。

潜ってそれを拾う。

確認してみた。

「やっぱり…」

嵐のボンゴレリング。

これがあったという事は近くに彼がいるはず…！

～～～～～～～～～～～～

「あっ…！」

沢田綱吉が気付く。

僕は戻ってきた。

獄寺隼人を抱えて。

1―2　上（後書き）

上だけでも長い（；´ー｀）Ａ
下はどうだろう…

1―2　下（前書き）

さぁ！！下だ！

私も書いてて手の汗半端なかった！！

どうぞっ！！→

1―2　　下

彼をパラソルへと連れていく。

「獄寺くん！！」

沢田綱吉が呼ぶ。

けれど、反応はない。

山本武が獄寺隼人の胸に耳をあてる。

そして言う。

「…息…してない…」

沢田綱吉が固まる。

「そんな…」

今にも泣きそうな声だった。

「落ち着け、ツナ！
まだ死んだわけじゃねぇ！！」

そう言った山本武も冷や汗をかいている。

「…死なせない」

「…え…？」

感付いた山本が言う。

「！！お前っまさか…！？」

…ごめん、獄寺隼人。

たぶん…嫌だろう…。

…でも…今は仕方ないんだ…。

…許してくれ…。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

僕は応急措置をした後に沢田綱吉に言った。

「…彼が目覚めたら、君が助けたとでも言っとけば」

「そっ、そんな!?どうしてですか!?」

沢田綱吉はかなり驚いた声で言う。

「…その方が彼のためだから…」

今日観察した彼を見た限り、彼は僕の事を避けている。

そんな奴に助けられ、しかも応急措置されたなんて聞いたら、かなりショックを受けるはずだ。

「でもっ…！」

「いいからそう言いな」

沢田綱吉の反論を聞かずに僕は言った。

「…それに…」

「…その方が彼は喜ぶだろ…？」

「…！」

沢田綱吉は黙った。

「…僕は先に部屋へ帰るよ」

…僕だってそう言いたい。

…だけど

彼はきっと寂しがるだろう。

何せ、いつも慕っている沢田綱吉（１０代目）じゃなくて、いつも群れるのを嫌う僕が助けたのだから。

僕が見たいのは彼の困った顔じゃない。

沢田綱吉と一緒にいる時に見せる

笑顔

苦い気持ちを心の奥底にしまって

僕はその場を去った。

1―2　下（後書き）

雲雀…！

あんた…！

。・（ノ凵、）・。・うわーん

書いててすごく切なくなったよ…（T^T）

1―3

すごく心配だった。

応急措置はしたけど、正直自信はなかった。

これでもし目覚めなかったら…

寒気がした。

どうしよう。怖い。

…あ、そうだ。

部屋に行ってみよう。

彼が生きてるかどうかきになる。

着替えも持っていった方がいいよね。

彼の旅行カバンを開いた。

その中にすごく気合いの入った感じがする組み合わせを見つけた。

たぶん最終日にいく水族館用の組み合わせなんだろう。

すると一瞬だけその服を着た彼の姿が思い浮かんだ。

…かっこよかった。

とりあえずラフな感じの服を持って、沢田綱吉の部屋に向かった。

…自ら群れにいくようなもんだな。

「入るよ」そう言って部屋へ入った。

獄寺隼人。頼む。

生きててくれ。

沢田綱吉の部屋に入って視界に入ったのは

獄寺隼人だった。

あぁ。

神様。

本当にありがとう。

すぐにでも抱きしめたかったが、彼がびっくりしてしまうからその気持ちを抑えた。

すると顔に出てしまったらしい。

彼は驚いた顔をして
「な、何だよ」
と言った。

喋ってる。

泣きそうになったが、それは僕のプライドが許さなかった。

「別に。無事だったんだなと思っただけ」

「雲雀も心配してたのな」

山本武が言う。

本当は
「普通そうでしょ」
とか言いたかったけど少し強がって

「…仮にペアだし」

と呟いた。

「わ、悪かったな…」

獄寺隼人が言う。

「君のせいじゃないでしょ。波のせいなんだから」

…あれ。

何か意外にすんなりと素直な事を言ってしまった。

恥ずかしい。

そして枕元に着替えを置く。

「…着替え。適当に持ってきたから組み合わせの文句はなしだよ」

しばらくした後に、彼は

「ありがとう…」

と照れた様に言う。

…にしても、気のせいだろうか。

…獄寺隼人の顔が少し赤かったような気がするのは。

１―４（前書き）

獄寺のパニック劇場を雲雀はどう見ていたのか。

嵐視点の獄寺を思い浮かべながらどうぞ↓

1／4

夜。

僕は今、自分たちの部屋にいる。

…正確には部屋についてた露天風呂に入っている。

普通に泊まってたら相当な額がかかるんだろうな。

改めて山本武と沢田綱吉に感謝。

本当はしたくないけど。

そろそろ上がろうかな。

適当に浴衣を着た後、扉を開けた。

「ただいま」

あれ。
何でただいまって言ったんだ？
まぁいいや。

返事をしてくれようとした彼がこちらを振り向いた。

すると一気に彼の顔が赤くなった。

「ちょ、おま、ゆか…！」

床？
床がどうかしたのだろうか。

僕には彼の言うことがさっぱり理解できなかった。

すると彼は布団にうずくまった。

…まるで小動物だな。

ちょっと面白くなって彼がうずくまっている布団に近づいた。

「どうしたの」

彼は顔を上げた。

瞬間に顔が真っ赤っかになった。

何かすごい慌てている。

目がぐるんぐるんしている。

そしていきなり止まった。

そして

「はひぃぃぃ！？」

と悲鳴に近い奇声を上げて後ろに退けぞっていった。

正直意味不明だ。

僕を見たらいきなり顔真っ赤にして布団にうずくまって、また僕を見たとたんに奇声出して退けぞって。

小動物というよりかは、彼が大好きと言っているＵＭＡに近い気がする。

「ねぇ」

「何だよ！！」

彼が顔を上げた瞬間

何か鈍い音が響いた。

すると彼は目を潤ませて、その場にうずくまった。

ワオ。

すごい破壊力だった。

色んな事が起こりすぎて頭が少し混乱してる。

「…あのさ…」

やっと普通に喋った。

「何？」

「…頼むから、ちゃんと浴衣着てくれ…」

あ。

やっと分かった。

僕は浴衣を直した。

ん？つまり…？

「…もしかしてさ」

「な、何だよぉ…」

潤んだ目で僕を見る。

照れるのを必死にもだえて聞く。

「今までずっとさっきのに反応してたの？」

潤んだ目で顔を赤くして恥ずかしそうな声で彼は答えた。

「…だったら悪いかっ」

何この子。

すごいかわいい。

今までずっと僕の姿に反応していたんだ。

そして耐えきれなくなって

笑った。

「な、笑う事ないだろ！？」

彼はいきなり強がった。

「つ、つーかお前が悪いんだよ！！ったく…」

ごめん。獄寺隼人。

君がとてもかわいく見える。

「ごめんごめん。面白くて…」

潤んだ目がまるでウサギみたいだ。

僕が声を出して笑うなんて、自分でも思わなかった。

獄寺隼人には少し悪い気もするけど。

獄寺隼人。

もう興味深いなんて思わない。

君は最高に

かわいい。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

しばらくずっと笑っていた。

獄寺隼人も一緒に。

笑い過ぎて暑くなったのか、彼は前髪を上げていた。

またかわいい事して。

君は僕をどうさせたいんだろう。

「ねぇ」

「何だよ」

僕は彼にアイスを差し出した。

「笑いすぎたお詫び」

イチゴ味のダッツだった。

本当は僕が食べようと思ってたけど。

彼はアイスを口にしようとした時、立ち上がった。

「ってこれ、オレが買ってきたヤツだろーがぁ！！」

「あ、ごめん」

僕は微笑んだ。

「ったく…」

なんだかんだ言って彼はアイスを食べた。

その後急にうずくまった。

そんなにアイスが美味しかったのだろうか。

それとも頭にキーンときたのだろうか。

でもどちらにしてもかわいかったのは言うまでもない。

１―４（後書き）

雲雀の中の獄寺のランク（？）がアップしましたね。
さて、これからどうなるのやら。

1ー5　上（前書き）

あのシーンです。

これも上中下です。

1-5　上

二日目。

今日は特に予定がなかった。

山本武と霧の守護者は出かけたらしい。

獄寺隼人は沢田綱吉の部屋に行っている。

そして僕は

館内の温泉巡りをしていた。

ほとんど入る事が出来たのでかなり満足している。

今は部屋にいるけど。

にしても

まだ帰ってこない。

ほとんど僕と同じ時間に部屋を出たのに。

…そんなに僕と居るのがいやなのだろうか？

いやいやそんな事を考えるなよ。僕。

余計に悲しくなるだろう？

気晴らしに炭酸飲料でも飲もうかな。

…って飲めないのに思ってみたり。

でも喉は渇いているから自動販売機で適当に何か買おう。

そう思って部屋を出た時、彼も沢田綱吉の部屋から出てきた。

一緒に買う？と声を掛けようとしたら、彼はトイレに駆け込んでいった。

よほど我慢してたのか？

仕方なく一人で買った。

…そういや山本武からもらった緑茶があるんだったな。

買った後に気づいた。

まぁいいや。このオレンジジュースは彼に後であげよう。

～～～～～～～～～

…遅くないか？

1時間近く待っている気がする。

まさかとは思うけど…

トイレの花子さんにでも会っているのだろうか？

…んなわけないか。

心配だったからトイレにいってみた。

…しまった、小銭をポケットに入れっぱなしだった。

トイレに着いてから気づいた。

1ー5　上（後書き）

雲雀が炭酸飲料飲めないってのは捏造だからね。
あとトイレの花子さんは流れね。

トイレ→花子さん

みたいな

1-5　中

「…獄寺隼人？」

声をかけてみた。

するとガタッと音が聞こえた。

「何やってるの？そんな所で」

「べ、別に…」

ん？

まさか本当に会って泣いたのだろうか。

「…泣いてるの？」

「…泣いてるわけないだろ」

声が少しおかしかった。

「にしては声が違うような気がするけど？」

すると彼は黙ってしまった。

まさか本当に…？

「…何かあったの？」

今、彼はトイレの花子さんに会っているのだろうか。

少し見てみたい気がした。

「ねぇ、ここ開けてよ」　「！　…いやだ！」

何？独り占め？

「…まぁいい。そんなにいやならそれでいいよ」

いつか絶対一人で見てやる。

「…あ…」

あ？

花子さんがどうかしたのだろうか。

「…何？一体…」

「…っ…」

そんなに花子さんがすごいの？

彼が次に何て言うか少し期待していた。

「…ごめん」

「…は？」

何が？

「…１０代目から…話…聞いた」

１０代目？沢田綱吉がどうかしたのだろうか。

「…何の？」

「…お前…オレが旅行に…行くって…聞いたから…来たんだろ？」

「…え？」

何で彼が…知ってる？

「…ペアになった…時…嬉しかった…んだろ？」

「…そうだけど？」

…て何さらっと言ってしまったんだ、僕は。

「…日焼け止め…クリーム…とかも…オレの事…心配…してくれたから…だろ？」

「そうだよ」

…てまた何さらっと言ってしまったんだ、僕は。

「…なのに…オレは…」

「…オレは？」

「…全部…拒んだ…」

…何かすごくごめんなさい…

「…きつかったよな？」

「…正直…ね」

「…オレ…てっきり…」

「お前も…オレと居ることを…いやだと…思い込んでた」

「…え…」

「…だから…この事…１０代目から…聞いた時…」

「…時？」

「…嬉しかった…」

…嘘…でしょ？

彼が…僕の事を聞いて…

嬉…しい？

「…でも…その分…」

その後彼が何て言うか想像がついた。

「…許せなかったんだろ？自分が」

「だから僕に申し訳なかったんでしょ？」

「…何で…分かるんだ？」

「君ならそう言うと思ったから」

「…そう…か」

次の言葉も想像出来た。

「だから…」

「？　だから…？」

「この後ごめんとか言わないでよ？」

手にこっそり持っていた１０円玉でカギを開ける。

「なっ…！？」

獄寺隼人の顔がとても赤かった。

「こういうカギって１０円玉で開けられるんだよね」

彼の手を掴んだ。

「みっ、見るな…！」

君が泣いてた顔なんて、

僕は絶対に

見たくない。

獄寺隼人を抱き寄せた。

「…ひば…？」

「たぶん相当な時間、泣いてたんだろ？そんな顔見られたくないでしょ？」

「あ…」

「…一旦部屋に帰ろう。続きはそれからだ」

ごめん、獄寺隼人。

少し強引だったね。

それには2つ理由があるんだ。

1つは君の泣いてた顔を見たくなかったから。

もう1つは

君の口から「ごめん」を聞きたくなかったから。

1ー5　中（後書き）

獄視点でちゃんと分かってて聞いてたと思ったら、頭の部分は花子さんで聞いてたんですねー？

ごめんなさい。はい。

1-5　下

今、僕は部屋にいる。

彼は泣いた顔を見られないためにタオルを被っている。

僕も彼のそんな顔は見たくない。

「落ち着きなよ」

と言って彼に緑茶をあげた。

こんな時にオレンジジュースはさすがに出せないから…。

「…で、話の続きだけど…」

言うんだ、僕。

今なら言えるだろう？

彼の顔を見ていないのだから。

「…ありがとう」

「…最初はただの厄介にしかならないと思っていたんだ。まさか誰も来るとは思ってない奴が来たようなもんだし」

「特に君なんかはそうでしょ？自分が慕う１０代目（沢田綱吉）との旅行のはずがイヤな奴との旅行になったんだから」

この後の彼の答えは予想はついてた。

「ま、まぁ…」と申し訳なさそうに言うんだろう。

「…それは…違う」

「…え？」

違う？

「もし１０代目からあの事を聞かなかったらそうだったかもしれねーけど…」

「今は…嬉しい」

タオルからチラチラ見える彼の頬が赤い。

「そう…」

「君がそう思ってくれるなら、僕は嬉しいよ」

嬉しい。確かに嬉しいけど。

心の奥に許せない何かがあった。

「それより…」

彼が被っていたタオルを取る。

彼は驚いた顔をしている。

そりゃそうだろう。

自分の泣いてた顔を人に見せるのはとても恥ずかしい事だ。

「か、返せよ!!」

そして抱き寄せた。

僕だって君のそんな顔は見たくないんだ。

でも

この言葉はちゃんと君の顔を見て言わないといけないと思ったんだ。

「ごめん」

そう言って彼の目尻に溜まっていた涙を拭う。

「な…！？」

「…相当泣いてたんでしょ？目の下かなり赤いよ」

「…あまり見るなよ」

そう言って彼は顔を伏せる。

「いやだ」

僕は伏せた彼の顔を無理やり上げる。

「…おまっ…」

「僕の事で泣いてたんでしょ？だから…」

「本当にごめん」

「あ、謝るなよ…」

焦った顔をしている。

どうだろう。

この流れで

あの言葉を言う事が出来るだろうか？

「それと」

「…あ…ありが…」

言うって決めたんだ。
必ず最後まで言わないと…！

「ありが…と…」

相当恥ずかしかった。
普段言わない言葉を言ったから。

「ぷっ」

「な、何？」

「あはははは…！」

「わ、笑うなよ…！」

彼は笑った。

頑張って言ったのに笑われたのはイラッときた。

けど

それ以上に嬉しかったのは

僕の前で君が笑ってくれた事だった。

「…さて」

「？　雲雀？」

何かを察したのか彼の顔が気まずそうになった。

「ひ、雲雀…？」

「黙っていろと言ったのに約束を破った人を咬み殺しに行かないと

ね…」
部屋を出ようとした。
「ま、待て！ひば…」
僕を追おうとした彼がつまづいた。
ドテンッ
「…まったく君って本当におっちょこちょいだね…」
「のわぁぁぁっ！！」
嬉しいハプニング。
「わ、悪い！すぐどく！！」
「…いや、この際これでいいよ」
「いやいやオレが良くねぇっつの！！」
また目がぐるんぐるんしてる。
彼は距離が近いハプニングがあるとパニックになってしまうらしい。

「で、何か言おうとしてたよね？」

僕の顔を見た彼は戸惑いながらも言った。

「…今回の事はオレが無理やり聞いたりしたようなもんだからさ…。１０代目の事は咬み殺さないでくれないか？」

「ワオ。君が？」

彼が沢田綱吉から聞き出したのか。

でも約束を破った事は変わらないからな…。

「…だったらオレを咬み殺しても文句言わねぇ…」

ワオ。

どういう意味だろう。

そんな事を言った本人は冷や汗をかいていた。

そうか。

やっぱり沢田綱吉の事なんだな。

だったら

「…じゃあ咬み殺さない代わりに1つ頼んでいい？」

「な、何だよ…」

こういう風にすれば彼は許してくれるかな。

「今までずっと君の事、獄寺隼人とか君とかで呼んでたでしょ？」

「？　…あぁ」

「これから隼人って呼んでいいかい？」

「え…ってえぇぇぇ！？」

予想通りに彼は焦っている。

実は心の内に密かに決めていたこと事がある。

彼の事を名前で呼べるようになる。

お願いだ。獄寺隼人。

どうか許して…。

彼の口が開く。

「…分かったよ」

照れながらも言ってくれた。

「…ありがと。隼人」

沢田綱吉。

もしかしたら君は気づいているかもしれない。

お願いだ。

君の右腕…隼人を

想っていていいかい？

1ー5　下（後書き）

ついに雲雀が獄寺の事を…？？

いよいよ第1章、ラストに近づきます…！

1ー6　上（前書き）

雲雀視点もついに第1章、ラストに入ります！！

遅くなってごめんなさい？

1-6　上

三日目。

今日で旅行が終わる。

長かったようで短かった隼人との旅行が終わってしまう。

最初はただの興味だった。

けど

その興味は僕の中で大切な存在となった。

…君の事だよ？隼人。

…何て言えるわけないだろ。

あくまでも隼人は沢田綱吉の自称右腕。

最後ぐらいは沢田綱吉と一緒になってもらいたい。

…けど

隼人を沢田綱吉に譲りたくない僕がいる。

どうすれば…？

「…り」

「雲雀！」

「…何？」

どうやら考えていた間中、山本武が僕の事を呼んでいたようだ。

「これからペア決めのくじするから来るのな」

「ん…」

…は？

またくじ？

…つまりこれで沢田綱吉に隼人を取られる可能性ができたって事？

…いいんだか悪いんだか…

「みんな持った？いくよ！せーのっ…！」

僕はオレンジだった。

隼人…何色だろう。

「雲雀さんは…オレンジですか」

沢田綱吉が言う。

「…君は？」

「オレは紫です。獄寺くんと一緒です」

「…そう」

ダメだった。

最後は隼人と一緒じゃなかった。

でも隼人は喜ぶ。

…一緒が良かったな。

「…雲雀さん」

「何？」

どうせごめんなさいとか言うんだろ？

だから聞き流そうとしていた。

「よかったら、代わりますか？」

「…は？」

予想外だった。

「あ、あの別にオレはいつでも一緒になれるっていうか…」

「…何？嫌がらせかい？」

「ち、違いますよ！オレは…オレはただ…」

「ただ？」

「…雲雀さんと獄寺くんにペアになってもらいたいんです」

「…沢田綱吉…」

「雲雀さんはあまり獄寺くんと一緒にいれる時間が少なくなっちゃうから…」

確かにそうだ。

この旅行が終わったら、隼人といれる時間はかなり少なくなるはず…。

「だから最後まで一緒にいたいでしょ？」

「…いいのかい？」

「はい。全然いいですよ」

「…すまない」

「謝らなくていいですよ。はい、これ」

沢田綱吉は紫が少し塗られた割りばしを差し出す。

そして僕は持っていたオレンジが塗られた割りばしと交換する。

「…楽しんできて下さいね」

ニコリと笑って沢田綱吉が言う。

「イーピン！オレと一緒だね！」

そう言って僕の元を離れた。

ありがとう。沢田綱吉。

君がくれたこのチャンス

絶対に無駄にはしないよ…。

「紫…？」

僕がそう言うと残った一人が振り向く。

「「あ…」」

「雲雀…」

「隼人…」

「…また一緒だね」

「…だな」

「…行こうか」

「…あぁ」

最後も隼人と一緒になれた。

沢田綱吉。

君に心から感謝する。

「じゃ、またここに集合な！」

水族館に入ろうとした時だった。

「獄寺くん！」

「１０代目？」

何か会話をしている。

まさかやっぱり隼人といたいとか言うのか…？

すると隼人が戻ってきた。

「何話していたんだい？」

「んー？何でもねーよ」

こうして隼人との旅行での最後のイベントが始まった。

～～～～～～～～～～

館内マップを広げて聞く。

「どこ行く？」

この水族館は遊園地もついているらしく、小動物にはたまらない施設となっている。

「結構時間あるし…とりあえず水族館見て、遊園地行くか？」

「いいよ。じゃ行こうか」

…いいよなんて言ったけど、大量の群れに耐える事が出来るだろうか…？

そんな不安を抱えて僕は歩き出した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「「おー…」」

目の前には大きな水槽があって、魚が気持ちよさげに泳いでいる。

写真撮ろうかな。

滅多にこんな所来ないだろうし。

…動いていて撮りづらいな。

カシャッ

「雲雀、今何か撮らなかったか？」

「…亀撮った」

危ない。

バレたかと思った。

僕が撮ったのは

水槽を見ている隼人。

…草壁や跳ね馬にバレないように、後でＳＤカードに写さないと…。

「…綺麗だな…」

カシャッ

…ん？

「…何撮ったの？」

「あ、あれ。イワシの群れ」

…群れ…か。

…別に僕はそんな群れまでも咬み殺す気はないからね？

でも…

こちらの群れは今すぐにでも咬み殺したい…。

「ねぇ、次行かない？」
「お、おぉ」

しばらく歩いていたら

「なぁ、雲雀」

と隼人が話しかけてきた。

…まさか僕の事を心配して？

ダメだ。迷惑をかけちゃいけない。

「…な、何？」

「だ、大丈夫か？」

…頑張って顔に出さないようにしてたけど、どうやらお見通しらしい。

「…大丈夫じゃない」

そう言うと隼人は少し焦り始めた。

ダメだ。隼人には迷惑をかけたくない。

「…でも我慢しとかないと…」

「隼人との最後のイベントが台無しになるだろ？」

…我ながら恥ずかしい言葉だな。

「…あ、あんま無理すんなよ？休みたくなったら言えよ？」

心配そうに言ってくれる。

「…うん。ごめん」

…隼人となれたのは嬉しいけど

それ以前に大量の群れに耐え、なるべく隼人に迷惑をかけない事が出来るだろうか…？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「…かわいい…！」

とアシカを見てる隼人が呟く。

…隼人の方がかわいい気もするけどね…。

なんて言ったら果ててしまいそうだからやめとこう。

「アシカ好きなの？」

「大好き…！」

危ない。一瞬クラッとした。

今のは破壊力抜群だったな…。

「へぇ…あ、こっち来た」

「マジか！！どこ！？」

隼人が振り向く。

ワオ…。

…かわいすぎた…。

「…うおぉぉ！！」

隼人は集まっているアシカに気を取られていた。

「…隼人…」

「何？」

「…近くないか？」

「アシカとか？こんなに近い事はめったにないぜ？」

「いや…アシカとじゃなくて…」

「…隼人との距離が…」

「はひ！？」

最近隼人は驚くとこの言葉を言うようになったな…。

「悪い！気づかんかった！！」

「…いや…」

何でだろう。

今までは別にどうってことなかったのに。

どうしてこんなにドキドキしているのだろうか…？

～～～～～～～～～

今僕は非常に珍しい状況が目の前にある。

全てのペンギンが僕の所に集結している。

「…動物に好かれてんな、お前」

自分でもなぜこんな状況になっているかは分からない。

隼人が、買っておいた餌でペンギンを呼んでいた。

「ほら、餌だぞー」

…ワオ、見事に無反応…。

すごくイラついたらしい。

様子を見ていた僕は、隼人に近づいた。

「1人で何やってんの？」

こうしたらペンギンはついてくるよな。

しかし隼人の所に近づくと分かったのか、一気に解散した。

「あれ…」

そして他の餌の所へ行ってしまった。

…そんなに嫌いなのかい、ペンギンよ…。

「…そうか…」

「？　隼人？」

「…そうかそうか…オレは餌以下か…」

「は、隼人…？」

「いいよなー雲雀は…動物に好かれて…」

隼人が落ち込んでいる。
どうしよう。

「と、とりあえず落ち着け隼人。ほ、ほら餌投げてみれば？」

隼人が餌を投げる。

一羽も来なかった。

「あ…」

「…だよな…」

にしてもペンギンひどいな…。

「で、でもさっきのは偶然だからさ」

「…じゃオレから離れてみれば？」

離れてみる。

…ワオ。

「雲雀だよ！全員集合！！」みたいになってる…。

「あ…え…と」

少しぐらい空気読みなよ、ペンギン！

どうしよう…。

辺りをキョロキョロしていた。

「！！　隼人！下！」

そこには奇跡的に小さなペンギンが一羽だけいた。

一気に隼人の顔が明るくなった。

ナイス。ペンギン！

…よくよく考えると、隼人の落ち込み顔はそうそう見れないような気が…。

…隼人には悪いけど

ラッキー…なんて。

1ー6　上（後書き）

…長かった。

久しぶりだったから指が何かジンジンする…？

1-6　中

水族館もある程度見終わったから、どうしようか迷っていた。

「どうする？遊園地行くかい？」

…とか言ってみたけど群れが…。

「オレはいいけどよ、遊園地ってかなり群れてないか？お前大丈夫かよ」

お見通しか。

「…今まで我慢できたんだ。きっと大丈夫だと思う」

何嘘言ってるんだ。大丈夫なわけないだろ…。

「あ、あまり無理すんなよ？」

心配そうな声で隼人が言う。

また胸がドキンとした。

…何なんだ？これは…。

疑問に感じつつも、隼人の後に付いていこうとした時だった。

きゅうぅぅぅ…

事件発生。

「雲雀、今何か聞こえなかったか？」

…聞かれた…！

恥ずかしくなってうずくまった。

隼人が振り返ると驚いた顔をしてこちらに向かってきた。

「おい、どうした？気分悪いか？」

隼人には心配掛けたくない。
正直に言おう。
「…の音」
「へ？」
「今のは…腹の音だ」
「腹…？」
隼人が考えている顔をする。
そして何か分かったらしく、おそるおそる僕に聞いた。
「お前…腹減ったのか？」
きゅうぅぅぅ…
な…！？

「…お前の腹は正直だな」

「うるさいな…」

何でよりによって隼人の前で…！！

…ボソッ

「？　今何か言った？」

「いや、何も」

何だったんだ？今の。

すると隼人は少し笑ってこう言った。

「…じゃ、先にメシ食うか？」

本当は食べたいけど、少し強がった。

「別にいいよ。平気」

「腹減ってんだろ？」

きゅうぅぅぅ…

…今なら恥ずかしさで死ねる…。

隼人は笑っていた。

まさか…からかってた！？

「…からかうな！」

「あははは！…ホント正直だな！」

…もう…いや…。

恥ずかしくて声も出ない。

でも…

普通の小動物なら咬み殺しているはずなのに…

隼人を咬み殺す気になれないのはなぜだろう…？

～～～～～～～～

とりあえず食事を済ませた。

夏休みのせいかかなり群れが多かった。

あぁ…咬み殺したい…！！

「雲雀、乗りたいのあるか？」

隼人が聞いてきたので探してみた。

「…あれ」

そう言ってあるアトラクションを指差す。

隼人が僕の指差す方向を見たその後だった。

「きゃあぁぁ…！！」

…何か清々しくなったのは何でだろう。

「…絶叫系好きか？」

隼人は嫌そうな声で聞く。

「嫌いならいいけど」

「嫌いじゃねーけど、食べた後だからどうかと思って…」

「大丈夫でしょ。行こう」

「えぇー…」

半分呆れ声で隼人が言う。

…あのアトラクションに乗れば、群れの事とか少しは気にしないでいられるようになるかな…？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「隼人は何乗りたいの？」

「…時間もそろっとアレだし、観覧車乗りてーな」

…え、嘘。

「雲雀？」

「いや、何でもない。行こうか」

何でもなくない。

よりによって…

よりによって僕の最も苦手なアトラクションに乗りたいとは…。

でも隼人は僕の乗りたいアトラクションに付いてきてくれた。

だから僕は弱音を吐くわけにはいかない…！！

～～～～～～～

…こんなに恐怖に怯えたのは何年振りだろう。

たぶんあの時以来だな…。

目の前がぐわんぐわんする…。

「雲雀？」

隼人は僕の方を見る。
…疑問そうな顔をしている。
隼人には…心配…掛けたくない…。
「…どうかしたのか？」
隼人が僕の肩に手を置く。
…あ…ダメ…だ。
もう…我慢の…げんか…い…

…それ以降の僕の記憶はない。

～～～～～～～～

「…う…？」

何かがぼやっと見える。

銀色の髪…

緑色の目…

「…隼人？」

「起きたか。大丈夫か？」

…？　何か見え方が違う…。

僕を覗きこんでる感じ…。

隼人の顔から視線を外し、何がどうなっているのか確認する。

…膝？

…膝枕！？

「…ごめん。すぐ起きる」

「いや待て、無理すんなよ。寝てていいから」

そう言って起きようとした僕をまた膝の上に寝かせる。

…迷惑かけてしまった。

「何か乗る前から暗かったよな。何かあったか？」

「…実は…」

「…観覧車苦手なんだよね…」

「嫌なら早く言えよ。そういうことは…」

呆れ顔をして溜め息混じりで隼人が言う。

「…ごめん」

隼人になら…

昔の事、話してもいいかな…。

「…僕ね」

「何だ？」

「小さい頃に一回だけ、３階から落ちそうになったんだ…」

「…へぇ」

「だからそれ以降は高い所はあんまり好きじゃないんだ…」

「ジェットコースター平気なのにか？」

「アレはすぐ落ちるから…」

「屋上は？」

「あそこは別だよ」

「ふーん…」

…初めて自分の事を他人に話したな…。

ふと隼人の方を見る。
銀色の髪が風に揺れた。
その時の隼人の表情はどこか大人びていて
また胸がドキンとする。
「何で言わなかったんだよ」
そう言って隼人は僕に顔を向ける。
少し目をそらす。
あんまり見られると気が持たない…。
「だって…」
「だって？」
「隼人は僕が乗りたかったのについてきてくれただろ？」
「そりゃそうだ。ペアなんだし」
「だから…」

「隼人が乗りたいって言ったから、たとえそれが自分が苦手なモノだったとしても乗らないといけないと思って…」

…また恥ずかしい言葉を…。

「…悪かったな」

少ししょぼんとした顔で隼人が言う。

「隼人は悪くないよ。悪いのは僕だ」

だいぶ楽になったから隼人の膝から頭を起こす。

「ありがとう。ずいぶん楽になったよ」

「そうか…。良かった」

でも本当は

もう少し寝てたかったな。

…なんて思ったり。

1ー6　中（後書き）

何か捉えようによってはヒバ獄というよりかは獄ヒバかもしれん…。
ま、捉え方は自由ですので？

1ー6　下（前書き）

ついにこちらもラストです！！

1-6　下

そうして楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

「よし、全員集まったね。帰ろうか！」

…終わってしまう。

お願い。

誰か。

時間を止めて。

三日間ずっと隼人といた。

色んな事があった。
だけど
その分仲を深める事が出来たと思う。
いつもはすぐにでも並盛に帰りたいと思う。
だけど
今は帰りたくないんだ。
まだ
まだ隼人と一緒に居たいんだ。

けど

時間はワガママを聞いてくれない。

並盛へと走る電車の窓から夕陽を見る。

あぁ

もうすぐ終わるんだな。

何もかも終わってしまうんだ…。

そうして僕達は

並盛に戻ってきた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あーっ、楽しかったなー！！山本！ありがとう！」

「楽しんでもらえてよかったのな。あ、この後親父が寿司食いに来ないかって言ってるから、皆で行こうぜ？」

「いいの！？行こう？みんな！！」

「僕はいい」

もう群れるのはこりごりだ。

「あ…そうですよね。わざわざ群れるのを我慢して来てくれたんですからね…」

沢田綱吉が納得しながら言う。

「じゃ」

「ありがとうございましたー！」

そして僕はその場を去った。

～～～～～～～～

並中に行く道を歩きながら考えていた。

最後に隼人に何か言っといた方が良かったかな…。

そう考えると頭がモヤモヤし始めた。

どうしよう。

戻るか？

いや、それは絶対に許さない。

また群れに行くような事になるから。

…隼人が来てくれたらな…

なんて。

そう思っていた時だった。

「雲雀ぃぃぃ!!」

…え？この声…

隼人…？

声のする方へ振り向く。

そこには息がとても上がっている隼人がいた。

「…隼人！？」

「…はぁ…はぁ…」

「…どうしたの？そんなに慌てて…」

「…こ…これ…」

そう言って隼人はあるものを渡す。

「…？何これ…」

「用はそれだけだ。じゃな」

「え、ちょっとまっ…」

言い終わらない内に隼人は走り出して行ってしまった。

〜〜〜〜〜〜〜〜

応接室のソファーに座る。

一体何だろう…？

小さな紙袋を開ける。

「あ…」

そこには小さな紫色のペンギンが付いたストラップが入っていた。

実は水族館のショップで気になっていたモノだった。

…わざわざこれを届けるためにあんなに走って来てくれたのか…。

また胸がドキンとする。

カサッ

紙袋から小さな紙が落ちてきた。

…何か書いてある？

その紙を裏返す。

「…これは？」

そこにはこう書かれていた。

雲雀へ。
色々楽しかったな。
実は１０代目から雲雀が人工呼吸してくれたって事、聞き出したんだ。

悪いな、勝手に。
そのお礼っていうか…とりあえずもらってくれ。
じゃ、夏休み明けに。
獄寺隼人

…そうか。そういう意味だったのか。

ストラップを握りしめる。

…ありがとう。隼人。

ヒュウ

風が吹いて隼人からの小さな手紙を飛ばす。

「…あれ」

その手紙がめくれる事が分かった。

めくるとそこにはこう書かれていた。

…ＰＳ。
お前はオレの事を考えて１０代目が助けたと言えって言ったらしいけど…

…別にオレはお前が助けてくれたって聞いた時…
嫌だなんて思わなかったからな？

つーか逆に…嬉しかった…から。

この文を読み終えた瞬間、何かが止まったような気がした。

そして床に膝をつく。

…やっと分かった。

今までに何回かあった胸がドキンとする正体が。

僕は

隼人が。

獄寺隼人の事が。

…好きなんだ。

1ー6　下（後書き）

ついに雲雀が「好き」という気持ちを自覚した…！！

第1章、完結！

次から第2章、始まります！！

第2章　接近（前書き）

かなりお久しぶりです。

学校とか色々忙しくて顔出せませんでした。

こちらも第2章です。

季節がかなりずれるのを承知の上でこれからもよろしくお願いします。

第2章　接近

あの旅行から一ヶ月。

夏休みも終わってまたいつも通りの日常が始まった。

旅行以降、隼人の顔は見ていなかった。

だからいつもよりは普段の生活も楽しめそうな気がした。

「…長」

「委員長？」

「…いたんだ」

「かなり前から一緒にいましたが…」

「ふぅん…」

最近は風紀の事よりも隼人の事を考えている事が多くなった。

風紀委員長としてあるまじき事なんだろう。

そんなのは分かっている。

でもやめる事は出来ないらしい。

あの時に自分の気持ちに気づいてしまったのだから…。

ドンッ

人にぶつかったらしい。

咬み殺そうかと思って振り向こうとした時。

「あ、悪い」

どこか懐かしい声が聞こえた。

「何だ、隼人か」

咬み殺すために構えていたトンファーを下ろす。

「あ、雲雀さん！」

隼人の後ろから沢田綱吉が顔を出す。

「沢田綱吉、夏休みはありがとう」

…あれ、何か言ってしまった。

沢田綱吉は少し驚いた顔をしたが、すぐに微笑んで

「いえいえ、こちらこそありがとうございました」

と言った。

「…それ、付けてるんですね」

「…何だ、知ってたの」

それというのは隼人がくれた紫の小さなペンギンストラップの事だ。

「獄寺くんにお礼でも言ったらどうですか？」

「…そのつもりだよ」

そう言って隼人の方へと歩く。

そしてゆっくりとすれ違いながら囁く。

「ストラップ、ありがとう」

「…屋上に行くから、邪魔しないでよ」

「はっ！」

チャイムが鳴り響く。

そして慌てて廊下を走る足音が響く。

～～～～～～～～

…緊張したな。

いつもなら何も感じずにただ通り過ぎるのに。

あの気持ちに気づいてからはいろんな事に敏感になってしまった。

特に隼人がいる時とかはそれ以上に。

ため息をつきながらフェンスにもたれかかる。

「ヒバリ！ヒバリ！」

「…悪いけど一人にしてくれる？」

そう言うと小さな鳥はまた空へと羽ばたいていく。

…これから何だか色々と大変になるな。

…ま、いっか。

第2章　接近（後書き）

次から本格的になりますからね。

…たぶん。

2―1（前書き）

季節外れというかずれてます（――；）

2―1

ミードリタナービクーナーミーモーリーノー…

鳥がそこら辺を飛びながら校歌を歌う。

つまりは暇。

特に群れも見当たらないし、珍しく平和な時間が流れている。

屋上で寝てこようかな…。

そんな事を考えてみると…

「雲雀さーん」

何てタイミングが悪いのだろうか。

「…開いてるよ」

そう言うと扉は少しずつ開いていった。

「…何だ、君か」

目の前に見えるのは、走ってきたのか分からないが、息が上がっている小動物一匹。

「少し…お話いいですか？」
「用件は？」
「獄寺くん情報」
小動物はにっこりと言う。
「…座りなよ」
「ありがとうございます」

「で、何」
「来週獄寺くん誕生日なの知ってますか？」
「…へぇ」
知ってたけど。
「それでですね…」
小動物はバックの中から一冊の雑誌を出す。
「…校内持ち込み禁止だけど？」
「え、あ、獄寺くんの借りたんですよ」

…いつか咬まないとだな。

「何か欲しいネックレスがあるらしくてですね…あ、これです」

そう言って広げたページに指さした所を見てみる。

確かに好きそうなデザインだった。

「買えばいいのに」

「お、オレそんなにお金ないですよ！」

値段をチラリと見る。

「…確かにこんなに持ってなさそうだね」

「うっ…い、言わないで下さい…」

…というか何故僕にそんな事を言うのだろうか？

「…で？本題は？」

「獄寺くんにプレゼントしてみたらどうですか？」

「…つまり買えと」

「いや、そんなつもりではなく…あ、獄寺くんからストラップ貰ったんですよね？」

言われてふと安全ピンからぶら下げたストラップを見る。
「お礼として買ってあげたらどうです？」
…別に買えない訳でもないけれど。
「君はいいのかい？」
「オレは山本達と一緒に次の日にでもお祝いしますから」
「…次？」
つまり…。
「当日に買ってあげればいいじゃないですか」
「当日だと間に合わないと思うけど？」
「一緒に出かけて買いに行けばいいじゃないですか」
ニコニコしながら言う。
「…それで隼人は喜ぶかい？」
「そりゃ勿論」
どこからそんなはっきりと言える自信が出るのか気になりつつ…
「…分かったよ」

「オレも協力しますね」
すると紙とシャーペンを取りだし、ネックレスの情報を書いて、僕に渡した。
「獄寺くんに明日の放課後に応接室行くように言っておきますね」
雑誌をバックに戻し
「失礼しました！」
と言って彼は部屋を出ていった。
「…全く…」
何と言うか彼はお節介な小動物だ。
「…委員長」
「！？」
横を見るといつの間にか草壁が立っていた。
「ワオ…聞いてた？」
「盗み聞きするつもりはありませんでしたが…」
少し焦るように草壁は言った。

聞かれたか…。

「…呆れるだろ？僕がこんな事するなんて」

苦笑しながら言う。

どうせ呆れられてるさ。

「…いいえ」

ワオ。

まさかの否定。

「良いと思いますが…」

「まさか同性に恋をするとは思ってなかっただろう？」

「そこには確かに驚きましたが…」

が？

「…別によろしいのではないですか？」

草壁は微笑んで答える。

「…協力してくれるかい？」

「勿論。委員長のためならば頑張りますよ」

…あ。

「あと…跳ね馬関係には言わないでね」

「はい」

跳ね馬に知られたら大変な事になりそうだからな…。

とりあえず明日の放課後用の口実でも考えるか。

2―2

とりあえず口実は作ってみたけど、通用するだろうか…。

「来ましたよ」

草壁が声をかける。

その奥には隼人の姿がある。

とりあえず来てくれたことにほっとした。

「入りなよ」

「わ、分かってるっつの」

そう言って隼人は部屋に入ってくる。

「…で？何の用だよ」

「…9月9日空いてる？」

「…空いてるけど何だよ」

その後、隼人はん？という感じの顔をした。

「買い物付き合ってくれない？」

第一関門、突破。

「え…ってえ!?」

予想通りの反応が返ってくる。

「んなの一人で行けばいいだろーが」

「確かに一人で行こうとしたよ。だけど…」

「僕はあまりアクセサリーに興味ないからさ」

順調順調。

「頼まれたのか?」

おっと、想定外。

「…跳ね馬にね」

ちなみに跳ね馬に対しての罪悪感は全く無いに等しい。

「隼人はアクセサリー好きでしょ?見るからに」

「好きっちゃ好きだけど…」

隼人は少し悩む顔をしたけど

「…分かったよ」

「ありがとう。助かるよ」

第二関門、突破。

「で？どこに行けばいいんだ」

「並中に来てくれればいいさ。午前中に」

「ん、了解」

「用はそれだけだよ」

「じゃな」

そう言って隼人は部屋を出ていった。

…ふぅ。

何とか上手くいった。

「へぇ、恭弥出かけるのか」

「そうだよ。だから何」

「困るなぁ、勝手に俺の名前使われちゃあ」

「言っとくけど貴方のためじゃないよ。隼人のためだからね」

…って、ん？

僕は一体誰と会話してるんだ？

「隼人…スモーキン・ボムか。恭弥もやるな」

明らかに草壁ではない。

「ま、俺の名前使ったなら代わりに何かさせろよ？」

この声…。

！！　まさか？

振り向くとそこには

「な？恭弥」

ニッコリとした顔の跳ね馬がいた。

「…いつからいたの」

「最初から」

…トンファー用意。

「まぁ落ち着けって。別に引きはしねぇよ」

「問題はそこじゃないよ」

全く…ついていない。

「ところでその日は何の格好で行くつもりだ？」

「制服に決まってるでしょ」

「え…」

跳ね馬は苦笑していた。

「？　何」

「せめて私服で行こうとは考えねぇのか？」

「考えないね」

跳ね馬は更に苦笑。

僕は何か変な事でも言っているのだろうか。

「恭弥…まさかとは思うが、私服持ってないわけないよな？」

「何枚かはあるよ」

跳ね馬はほっとした顔をする。

「…そういう日ぐらいは私服で行けばいいのに」

「枚数が少ないから」

「私服の方が隼人喜ぶんじゃねぇか？」

…喜ぶ？

「？　恭弥？」
「…本当に？」
「へ？あぁ…たぶんな」

僕は立ち上がる。

「どこ行くんだ？」
「学校の見回り」
「そ、そうか…」

…確か明日は日曜日。

「…跳ね馬」
「何だ？」
「…明日、服買うの付き合ってよね」
跳ね馬は驚いた顔をしたが

「あぁ」

と言った。

そうして僕は部屋を出ていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3186w/

雲と嵐～雲視点～

2011年12月4日02時46分発行